



座談会

ロングステイの現在と未来

最終号では、観光を専門とする研究者や国内外で滞在を楽しむ実践者など、多様な背景を持つ各分野の専門家4人にロングステイの「現在」と「未来」について語っていただきました。これからのロングステイをさらに深く楽しむための示唆と、ヒントに溢れた座談会となりました。

FUTURE LONGSTAY

コロナ禍後に拡大した 現役世代のロングステイ

——コロナ禍を経て、ロングステイのニーズにどんな変化があったと思いますか？ ご自身の体験も含めてお話しください。

福永 かつては退職者がロングステイの主役で、現役世代がロングステイをするのは難しかったのですが、コロナ禍を経て通信環境も変わり、現役世代も工夫次第で実現可能になっています。

私の場合は「孫の英語教育」を理由にハワイでのロングステイを何度か決行。そこで他国から同様に孫や子の英語教育を目的に長期滞在する家族たちと交流し、盛り上がったものでした。

川嶋 福永さんが言われたようにコロナ禍以降、オンライン環境の整備により現役世代のロングステイの可能性が劇的に広がりました。今話題のマレーシアの親子留学は10年前は一部の先進的な層だけが実践していましたが、コロナ禍を経て層が広がったと感じます。

コロナ禍で海外に行けず、国内ロングステイに目が向いたという変化もあります。田安の影響で欧米での滞在が劇的に減り、アジア

の人気が高まっている他、海外での滞在期間を短縮他傾向も見られます。また、以前に比べて例えば英語やダンスの学習など、滞在先で何をするかを重視する人が増えています。そして、目的が明確な人はロングステイを計画のみで終わらせず、実行させる傾向があります。

黒田 長年ロングステイの人気国1位だったマレーシアはMM2Hビザの取得条件が厳しくなり、滞在者が減っています。一方、タイやフィリピンのセブ島などは今も一定数の滞在者がいるようです。

川嶋さんが指摘されたように、最近では北海道や長野など国内での長期滞在が注目されています。私自身もコロナ禍後にクルーズや飛行機で世界一周旅行を3回行い、国内の魅力を再認識しました。今は家内とキャンピングカーでニセコや稚内などに55日間滞在中で、その車中からお話しています。

安島 私は明治時代から別荘地として発展した軽井沢や鎌倉の歴史から、観光地計画の基本的な考えを研究しており、日本のいろいろ



安島博幸氏

ロングステイ観光学会会長

立教大、金沢工業大、跡見大などで約40年、教鞭をとり観光地計画を専門に研究。金沢市、軽井沢町、川越市、鎌倉市などの観光地計画の策定に携わる。2016年の設立以来、ロングステイ観光学会の会長を務める。



黒田明雄氏

ロングステイ財団登録講師 & アドバイザー

教育機関に在職中の50代からマレーシアを中心に、ロングステイアドバイザーとして活動。退職後は海外滞在の他、夏は北海道、冬は長野と季節ごとに住む場所を変えるライフスタイルを実践。



福永佳津子氏

ロングステイ財団政策審議委員

夫の駐在に同行してニューヨークに6年滞在した経験から、「お母さんのホームステイ」を企画し大好評を得る。これを機に海外ロングステイの普及に尽力。1995年、ロングステイ財団評議員に就任。



川嶋彩氏

ロングステイ財団事業部長

トラベルジャーナルやJATA国際観光会議・世界旅行博など観光業界でキャリアを積み、2014年からロングステイ財団に勤務し、11年間に亘りロングステイの変遷を見てきたエキスパート。

FUTURE LONGSTAY

人と出会うことで学び、 気づく機会がロングステイ

——今の社会にとって、ロングステイはどのような意味を持ち、どのようなニーズや課題があると思いますか？

福永 最近の若い世代は昔ほど一つの企業や仕事にとらわれることなく、自分のプライベートライフも大事にするという考え方の人が増えていると感じます。

例えばジョージアという国は物価や家賃が極めて安く、日本の若者たちが現地で生活しながら仕事をしています。「今でない」と考え、当たり前のように現役世代から人生のいつとき、海外に滞在する人が増えているなと思います。

川嶋 確かに若い世代は、就職先を決める際にテレワーク制度の有無を重視するなど、オンとオフがボーダーレスになってきていると思います。ロングステイは学びと

な形のロングステイについて調べてきました。海外ロングステイが隆盛し始めた時期に、国内にも軽井沢、八ヶ岳、安曇野など「リゾートオフィス」が実験的に作られました。当時はインターネットがな

かったのであまりうまくいきませんでした。技術の発達によりリモートワークが可能になったことは、ロングステイのあり方を大きく変えたと思います。

気付きの機会なので、現役世代にこそ必要なのではないかと思っています。今は世界のあちこちで分断が起きていますが、福永さんが指摘されたように若いうちからそういうライフスタイルを体験したほうが、平和な世の中になる気がします。

黒田 私の世代は、現役時代は一生懸命仕事をして退職後に人生を楽しむライフスタイルでしたが、若い世代の中には異なる人生を歩む人がいます。パラグアイに行った時、飲食店の開業を目指す人やリモートで日本の仕事をしているプログラマーなど20〜30代の若者に会いました。若い人は海外に触れることで視野が拡大し、自分の将来について考える機会を得られると思います。私も70歳を超えています。今もいろいろな出会いにより人生が豊かになっています。

安島 黒田さんのように、いろいろな場所でも長期滞在を実践されているのは素晴らしいことだと思います。今はニセコでどう過ごされているのでしょうか。

黒田 場所を変えて暮らす感覚で、自宅でしていることをニセコでしているという感じです。涼しいので、エアコンをつけなくていいのが一番のメリットです。いろいろな滞在先に友人がいて、パークゴルフや釣りなどの活動を共にして交流しています。

いろいろな人生を歩んでいる先輩や同世代の方に出会い、刺激を受けることが多いので、ロングステイは自分にとってプラスになっていると思います。キャンピングカーのくるま旅では86歳の先輩もおられ、私のセカンドライフの良きロールモデルになっています。

安島 私は歴史研究を通じて旅の楽しさの要素を探り、交流や社交が非常に重要だと考えてきたのですが、黒田さんのお話を聞いてその理論が正しかったと改めて感じました。ロングステイで大事なのは、他の人との交流や社交といった楽しみではないかと思っています。
川嶋 マレーシアの語学学校でインタビューした際、育児休暇を利用して夫婦でマレーシアに滞在し、どちらかが休んで面倒を見ると

いった形ではなく、協力して子育てをしながら二人で語学学校に通ってスキルアップしているカップルもいました。若い世代は柔軟な選択肢を持っていると感じました。

小さな役割や楽しみが 地域に滞在者を惹きつける

——ワーケーションやデジタルノマドといった働き方は、ロングステイにどのような影響を及ぼすと考えますか？

川嶋 ワーケーションやデジタルノマドなどは若い世代の間で、今後さらに広がると思います。例えばクルーズは、以前は寄港地しかインターネットがつながりませんでした。最近ではSETEC(衛星を利用した高速インターネット)のおかげで船内でも接続できるようになり、クルーズ旅行もワーケーションの選択肢になりつつあります。

安島 ワーケーションという言葉が生まれる前から、川端康成が『伊豆の踊子』などを執筆したように、作家たちは温泉地などで執筆活動をしていました。私も40年前に伊豆に別荘を建てた時、将来はこういう場所です仕事ができるようになるだろうと考えていました。

1980年に出版されたアルビントフラーの『第三の波』で紹介され

た「エレクトロニックコテージ」という概念が、今まさに実現していると思います。全国の自治体が空き家を活用して、テレワーク施設やシェアオフィスを整備しています。ただ、意外に活用されていないのが現状です。需給のバランスがとれていないのかもしれない。もっと活性化のポイントがある気がします。

福永 私の孫世代はZoomを当たり前のように使いこなして、タレント生活に自然に馴染んでいます。このデジタル・ネイティブ世代が成長すると、自分のお気に入りの場所です仕事をするのがさらに容易になり、ロングステイの様相も大きく変わると思います。

黒田 若い世代はネットにつながる環境があればどこでも仕事ができますが、会社の制度がテレワークやワーケーションに対応しているかが重要だと思います。釧路市は夏の長期滞在者が多く、十数年

に亘って北海道で一位を占めていますが、市がバックアップして「くしろ長期滞在ビジネス研究会」という民間組織を作り、滞在者と地域住民の交流機会を提供するなど、長期滞在者を受け入れるシステムを構築しています。このような地域は日本にまだ少ないですが、もっと増えれば、若い方もよりワーケーションがしやすくなると思います。

——ロングステイは今後、地域や個人にどのような貢献し、必要とされていくのでしょうか。

川嶋 本年6月に日本政府は地方創生2・0の取り組みとして、ふるさと住民登録制度の創設を打ち出しました。近年災害が多い日本では、防災の観点からも二地域居住



や第二の拠点を持つことが重要になってくると思います。ひとりの人が複数の地域に滞在し、経済活動をすることで、地方創生にも貢献できる側面もあります。

地方にはまだロングステイに適した滞在施設が少ないのですが、今後長期滞在しやすい環境の整備は、さらに進んでいくと思います。

安島 軽井沢や葉山など日本の避暑地やリゾート地は、関東大震災や戦争の空襲の際に避難先として機能してきた歴史があり、川嶋さんが指摘された災害対策に対する視点は非常に重要です。

また、ロングステイ先には楽しいこと、面白いこともないとなかなかうまくいかないと思います。

『波乗りオフィスへようこそ』(2019年)という映画がありますが、これはサーフスポットとして知られる徳島県美波町にオフィスを作ったところ、多くのIT技術者が集まって人材不足が解消したという実話に基づいています。このように「楽しい、面白い」と思える場所を作ることも大切です。

黒田 釧路市の夏のリピーター滞在者は、地域の人や地域の活動と関わりを持っている人のように思えます。単に涼しさだけを求めて来る人は、あまり来訪が続かない傾向が見られます。

釧路市には十数年前から月単位のアパート契約が可能な仕組みがあります。長期滞在者を誘致して経済効果を生み出すためには、このように自治体がバックアップをしながら民間サービスを活用することが重要だと思います。

福永 日本のある地域で、滞在先でちょっとした仕事ができるという興味深い取り組みを耳にしました。図書館で本の貸し出しを手伝ってもらなどで、地域での役割を担ってもらう仕組みを作っているそうです。それにより滞在者は町に溶け込み、自分の経験やノウハウを還元できる機会も得られます。目的や楽しみ、小さな役割などが滞在先にあると、ロングステイがよりしやすくなり、第二の故郷になる可能性も高まると思います。

川嶋 ロングステイに夢と希望に溢れたイメージを持つ方も多いですが、一方で異なる場所での日常生活には失敗やトラブルもあります。それらを解決するのもロングステイの楽しみと捉えていただき、不安な方はまず2週間くらいの滞在から小さな一歩を踏み出してほしいです。本誌は終了しますが、今後もインターネットなどで情報発信を続けていきますので、ぜひご覧ください。